
**Who makes
me happy?**



ココは毎日変わらない日々を過ごしていた。

平日は仕事、週末は友達とご飯。そして、また月曜日が始まる。
仕事は割と忙しく、あっという間に一日が終わる。

気づくといつも1週間、1ヶ月があっという間だった。
ココはあまり自分のことについて考える時間がなかったし、考えようとも思っていなかった。

ただ、やらなくてはいけないことに埋もれていて、それをこなすのに精一杯だった。

つまり、
ココにとっての人生は、

月曜から金曜日は仕事をし、週末は友達と過ごすか、のんびりする。

ただ、それだけだった。

そんな毎日が過ぎていたが、ココはそんなことに何も疑問をもたなかった。

そんな時、ココはある年上の女性と偶然出会った。

彼女の名前はカラ。

小さい人材関係の会社を立ち上げていた。つまり、社長である。

ココの友達に社長はいない。そんなココが、偶然にもカラと出会った。

いつも同じことをしていたココだったが、少しだけその日は違うことをしたのだ。

なぜだか気になったセミナーに参加した。

そのセミナーは決して安いものではなかったが、長いこと会社勤めをしていたココは、それを払うだけの金銭的余裕はあった。

そこで、参加したセミナーの参加者の一人としてカラはいた。

そのセミナーはまず、自己紹介から始まった。

自己紹介には5分間だけそれぞれ考える時間が与えられた。自分の好きなこと、特技など、なんでもいいので、自分について話すこと。ただし、5分間でおさまるように。それが自己紹介に与えられた唯一のルールだった。ココは考えた。でも何も浮かばなかった。

「みなさん、準備はいいですか？まだ時間が欲しい人は教えてください」と講師がたずねたが、ココはまだだという、手も挙げられなかった。どのくらい時間があればいいのかすらもわからなかったのだ。

そして、自己紹介は始まった。

ココはそれぞれ参加していたメンバーの自己紹介をきいて、少し萎縮してしまった。経営者の参加者が異様に多かったからだ。そして、みんな生き生きとしていて、ココにはとてもまぶしく感じ、そしてココはなぜ自分がその場にいるのか、そもそも参加していること自体に疑問を感じ始めてしまった。

ココは自分が場違いだと思った。なんで来てしまったんだろう。こなければ良かった。そんな後悔や自責の念がココの頭の中にぐるぐるまわった。でも、この場で席をたって、帰る勇気もない。払ったお金ももったいない。

だからココはその場にいた。その場にいるしかできなかった。

そして、ココの番がきた。

ココは自分の席を立ち上がると、みんなの前に立った。緊張どころの騒ぎではなかった。ココの人生において、人前で立って話をするなどなかった。たとえ大勢の前でないとしても、ココには初めての経験だった。まして、その題目が自己紹介である。ココは今まで自分が誰かなんて考えたことがなかった。自分のことを知ってもらうなんて考えたこともなかった。ココには何も話すことがなかった。名前だけだった。

そして、ココは静まりかえった場で、ぼそっと小さく自分の名前をいった。「ココです。 えっと……」それから、長い沈黙だった。泣きたくなってきた。顔が赤くなっているのを自分でも感じていた。

そしてもう一言、やっと出てきた言葉は、「普通の会社員です」

それだけが精一杯で、ココはペコっとうつむきながらお辞儀をすると、自分の席に足早に戻って行った。

拍手が聞こえたが、ココにはもう、何も頭に入ってこなかった。

そして、頭が真っ白になって、始まりで、既に疲れきったココに、与えられた次のお題は、二人一組になって、話をしながら、自分の目標、得たい事を明確にすること、だった。ココはそこで、隣に座っていたカラとペアーになった。

カラは社長という肩書きでもいっさい偉そうな素振りをみせず、たんと物事を話す女性だった。たくさんのお話を話した訳ではなかったが、カラの話す内容は、ココの視点とは全く異なるもので、聞くこと全てが新しく感じた。

そしてカラはココに尋ねた。

「ココさんは自分の人生で得たいものはなんですか？」

ココは、質問の意味すら理解に時間がかかった。

.....自分の人生で.....
.....得たいもの..... ?

ココはまた頭が真っ白になった。人生って、言葉が大きすぎて、ココにはピンとこなかったのだ。

そして、得たいものって??

もし誰かが単に、「欲しいものは？」とココきいたら、おそらくルイヴィトンの財布と答えるだろう。

でも、質問はそんなことじゃないのは、ココにもわかった。

自分の人生で得たいもの。もっと大きな意味のあることなのだ。

そこで、ココは素直に答えた。
「.....考えた事ありません..。」

カラは微笑んでいった。
「そう。じゃあ、好きな事はありますか？」

カラの年齢はココには一回り年が上にみえた。もちろん、きいてはいないが。でも、カラはココにセミナーの間は敬語で話を続けた。きっと、ココを対等に扱うという尊重の現れなのだろう。

ココは、質問に答えようと、即座に考えた。
自分の好きな事を考えたのだ。

自分の好きな事を考えている。

好きな事なのに考えないと答えられないこと、これはココも驚きだった。

自分の好きな事すら答える事ができない、ということだからだ。

「.....好きな事もわかりません..。」

ココはそんな自分を恥ずかしく感じ、またカラに対して申し訳なく感じた。二人一組になった相手が自分で、きっとカラは残念に感じているに違いないと、ココは思った。ココはそんな思いから、ぽつりと「すみません....。」とつぶやいた。カラはそんな答えに動じる事もなくさらっと言った。

「じゃあ、今日から探せばいいですね。それを見つける過程を楽しめばいいですよ。」そして続けた。「好きな事の延長線上に、自分の人生の目的があると思うんです。お互い頑張りましょうね。」

カラは笑顔だった。

ココはその言葉を噛み締めた。

そして、そのセミナーは終了した。

ココはセミナーの資料をみて、ようやく、気づいた。ココが申し込みをした時、副題に気づかなかったが、そこには”成功者を目指す経営者のための最初の一歩”とあった。それすらもしっかりと見ないで、このセミナーを申し込んでしまったココは、少し笑えてきた。

でも、初めて、気づいた。自分の好きな事は何なのかということも、ココにはわかっていなかった、ということ。

そもそも、自分の好きな事すら考えた事がなかったのだ。

だから、それを知らない事すらも、気づいていなかったのだ。

気づいていない事に気づく、ということは決して簡単なことではなかった。ココは今日、少しだけそのことを理解し始めた。

慣れない経験と新しいことだらけの一日だった帰り道、ココはふとぼんやりと空を見上げた。

そこには夜の始まりである紺色と昼の終わりを告げるオレンジ色が重なり始めていた。

Who makes me happy?

<http://p.booklog.jp/book/37209>

著者 : fujimoto mayako

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/fujimotomayako/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/37209>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/37209>

読んでくださってありがとうございます。

この本を通して、少しでも何か気づきを得るきっかけになっていただけたら
ほんとうに、嬉しいです：)

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.